

今の自分にできること

阿波市立阿波中学校3年 西村 碧樹

税金と聞いて真っ先に思いつくのは、消費税だ。公民の教科書には、消費税以外の税金についても示されている。例えば、個人の所得にかかる所得税、ガソリンにかかる揮発油税、土地・家屋などにかかる固定資産税など、あらゆるものに税金が課せられていることが分かる。納められた税金の用途を詳しく知らなかった僕は、税金に対して、「税金＝負担」といったマイナスイメージを抱いていた。しかし、先日、両親と一緒に語り合った亡き曾祖母の思い出話が、僕の意識を大きく変えた。

僕の曾祖母は、昨年、九十八歳で亡くなった。僕のお宮参りの写真には、赤ん坊の僕をしっかりと抱いた笑顔の曾祖母の姿がある。ただ、僕には、ベッドに横たわる曾祖母の記憶しかない。僕が会いに行くと、とても喜んでくれた。そんな曾祖母の死は、本当に辛かった。父と母が話してくれた曾祖母は、働き者で、八十歳を過ぎても畑仕事に精を出し、庭の草取りを欠かさない几帳面な人。しかし次第に認知症の症状があらわれはじめ、炊事や洗濯などの日常生活に介護が必要となった。そんな曾祖母の世話をしていたのは、祖母だ。祖母は食事の用意や部屋の掃除、着替えや洗濯など曾祖母の身の回りの世話を献身的に行っていたそう。当時を振り返り、母は言った。「毎日当たり前のようにおばあちゃんのお世話をしていたけど、お母さん、本当は、身体的にも精神的にもきつかったと思う……」

僕は、介護がどれだけ大変かを改めて知った。それと同時に、高齢化が進む日本において、介護は家族だけの問題ではなく、社会全体で解決しなければならない問題だと思った。

祖母の懸命の介護は数年間続いたが、曾祖母の症状は改善されなかった。自分一人での介護の限界を感じた祖母は、市役所に相談し、介護保険制度による介護サービスを利用することにした。そして、曾祖母の特別養護老人ホーム（特養）への入居が決まった。特養では、食事や入浴等の介護、リハビリや医師による健康管理、さらには、季節にちなんだイベントも行っているそう。

祖母の様々な負担を軽減させたのは、介護保険制度である。介護保険制度とは、介護が必要な人にその費用の一部を給付する制度だ。その財源は、四十歳以上の人から集められた介護保険料と国や県、市町村からの税金なのだ。僕の中の税金に対するマイナスイメージが、「税金＝人と人との支え合い・助け合い」というプラスのイメージへと変わっていった。

今の僕も、税金による「支え合い・助け合い」の中で生きている。調べてみると、学校の授業料の他、教科書、教室の椅子や机など、学校教育に関わる全てのものが税金で賄われている。中学生の僕はまだ税金を納めていないが、全力で勉強に励むことで、税金の意義を証明していきたいと思う。そして、曾祖母の思い出と共に、感謝や恩返しの心を大切に、将来、社会に貢献できる人間に僕はなりたい。